



迎賓館設立の沿革

迎賓館のある場所は、かつて紀州徳川家の江戸中屋敷があったところです。明治維新以降、我が国は近代国家として成長しましたが、30年経つて洋風の東宮御所を新たに建設しようとする気運が起り、明治32年（1899年）に着工して10年の歳月をかけて、明治42年（1909年）に敷地面積117,062平方メートル（35,411坪）、建坪5,170平方メートル（1,566坪）の赤坂離宮が完成しました。建物は、幅125メートル、奥行き89メートル、高さ23.2メートルの広大なものです。

建物の構造は鉄骨補強煉瓦造りで、地上二階、地下階の耐震、耐火構造となっています。明治時代の建築家片山東熊（かたやまのぶ）の総指揮の下に、当時の流建築家や美術工芸家が総力を挙げて建設した、日本における唯のネオ・ロココ様式の西洋風宮殿建築です。

この建物は、昭和天皇や今上天皇が時期お住まいになった以外、東宮御所としてあまり使用されることはなく、戦後、建物、敷地ともに国に移管され、国立国会図書館、内閣法制局、東京オリンピック組織委員会など国会及び行政の機関に使用されていました。

戦後十数年経つて、国際関係が緊密化し、外国の賓客を迎える機会が多くなってきたところ、我が国にはこれに充てる国の施設がなかったため、昭和38年（1963年）国の迎賓館を作る方針が立てられ、昭和42年（1967年）、赤坂離宮を改修して迎賓館に充てること が閣議決定されました。改修工事は、昭和43年（1968年）から5年有余の歳月と108億円の経費をかけて行われ、和風別館の建設と合わせて昭和49年（1974年）に現在の迎賓館赤坂離宮が完成しました。本館の改修は村野藤吾が、また、和風別館は谷口吉郎が設計しました。

開館以来、世界各国の国王、大統領、首相などの国賓、公賓がこの迎賓館に宿泊し、歓迎行事を始めとして首脳会談、要人との会談、晩餐会の開催など、華々しい外交活動の舞台となっています。また、先進国首脳会議（1979、1986、1993）、日本アセアン特別首脳会議（2003年）などの重要な国際会議の会場としても使用されています。

なお平成21年（2009年）、創建当時の建造物である迎賓館赤坂離宮の本館、正門、主庭噴水池等が明治維新以降の建造物としては初めて国宝に指定されました。



〒107-0051 東京都港区元赤坂2丁目1番1号
 電話: (03) 3478-1111(代表)
<http://www8.cao.go.jp/geihinkan/index.html>



迎賓館

赤坂離宮





彩鸞の間

「彩鸞の間」という名は、左右の大きな鏡の上と、ねずみ色の大理石で造られた暖炉の両脇に「鸞」と呼ばれる架空の鳥をデザインした金色の浮彫りがあることに由来しています。

白い天井と壁は金箔が施された石膏の浮彫りで装飾され、10枚の鏡が部屋を広く見せています。室内の装飾は、19世紀初頭ナポレオン1世の帝政時代を中心にフランスで流行したアンピール様式となっており、石膏金箔張りが施された鏡、兜、剣など軍隊調のモチーフで装飾され、天井は床面から約9mあり、楕円形のアーチ状は天幕を張ったように見える意匠となっています。なお、椅子張り裂地の赤はアンピール様式のトレードマークと言えます。

この部屋は、表敬訪問のために訪れた来客が最初に案内される控の間として使用されたり、晩餐会の招待客が国・公賓に謁見したり、条約・協定の調印式や国・公賓とのテレビ・インタビュー等に使用されています。

(注)アンピール様式……ナポレオン1世(在位1804~1814)がフランス革命後に政治的混乱を收拾して、第一帝政を確立してから、19世紀中期頃まで流行した室内装飾や家具様式をアンピール(帝政)様式と呼んでいる。室内装飾と家具においては、厳格なシンメトリーの原則が守られ、それらは全て直線によって構成されている。モチーフとして軍隊調のものが著しく、スフィンクス、鷲、花輪、月桂樹なども取り入れられている。



花鳥の間

「花鳥の間」という名は、天井に描かれた36枚の絵や、欄間に張られたフランス製のゴブラン織風綴織、壁面に飾られた30枚の楕円形の七宝に、花や鳥が描かれていることに由来します。

周囲の腰壁は茶褐色の木曾産のシオジ材で板張りしてあり、その壁の中段を飾るのが七宝です。下絵は日本画家の渡辺省亭が描き、明治期の七宝焼の天才・清川惣助が焼いたものです。

部屋の装飾はアンリー2世様式で、天井には、各格子の区画にフランス人画家が描いた花卉鳥獣の油絵24枚と金箔地に模様書きした絵12枚が張り込まれています。シャンデリアはフランス製で、重量は迎賓館のなかで一番重く約1,125kgもあります。

この部屋は、主に国・公賓主催の公式晩餐会が催される大食堂で、最大約130名の席が設けられます。また、それ以外にも首脳会議等の場としても利用され、昭和61年(1986年)の第12回主要国首脳会議(G7)はこの「花鳥の間」で実施されました。

(注1)ゴブラン……ゴブラン織は、別名タペストリーともいう。ゴブラン織として一般に認知されたのは、15世紀頃にパリで染物業を営むゴブラン家の兄弟が造った織物で、ゴブラン家の家紋が織り込まれている織物をゴブラン織と呼ぶことが許されて、その名が残った。

(注2)シオジ……モクセイ科トリネコ属。落葉高木、奥羽地方や長野県に多い。広く建築、内装材として用いられている。

(注3)アンリー2世様式……フランスの16世紀後半、アンリー2世(在位1547~1559)時代を中心に使われた建築装飾で、フランスにおけるルネッサンス様式。

(注4)シャンデリア……迎賓館のシャンデリアは、すべてフランス製で明治41年(1908年)アントワープより輸入されている。器具の金属部分は黄銅製鋳物や引き物で、飾り金物は動物や人の顔、植物など見事な彫金で造られている。電球用のセードは火炎、花びら、グローブ形で、装飾用ガラスは木の葉、玉形、剣先形にして取り付けられ、その形状は客室の仕様と完全に一致している。



羽衣の間

「羽衣の間」という名は、謡曲の「羽衣」の景趣を描いた300mの曲面画法による大絵画が、天井に描かれていることに由来します。

室内は、フランス18世紀末の古典主義様式で、当館で最も大きな部屋。3基のシャンデリアは当館で最も豪華なもので、およそ7,000個もの部品で組み立てられており、高さは約3メートル、重さは約800kgであり、壁は楽器、楽譜等をあしらった石膏の浮彫りで飾られている。また、正面の中二階はオーケストラ・ボックスがあり、かつて、この部屋が舞踏会場として設計されたことが偲べれます。

この部屋は、雨天の際に歓迎行事を行ったり、レセプションや会議場等として使用されており、また、晩餐会の招待客に食前酒や食後酒が供されるところでもあります。



朝日の間

「朝日の間」という名は、天井に描かれた「朝日を背にして女神が香車を走らせている姿」の絵に由来します。周囲の16本の円柱はノルウェー産の大理石です。

壁には、京都西陣の金華山織の美術織物が張られ、床には、紫色を基調とした47種類の糸を使い分けて桜花を織り出した緞通が敷かれています。

家具、室内様式はフランス18世紀末の古典主義様式です。また、高さ8.6mの天井からのシャンデリアはフランスから輸入したもので、クリスタルガラスを主体に造られています。

この部屋は、国・公賓用のサロンとして使われ、ここで表敬訪問や首脳会談等が行われています。

(注)フランス18世紀末の古典主義様式……18世紀末のフランスで流行した建築装飾の様式で、ルイ16世の時代でもあり、ルイ16世様式ともいわれる。直線と矩形の厳格な比例から構成され、装飾には、ギリシャ建築に見られるコリント・オーダーの柱、帯模様の編形、アカンサス、月桂樹の葉などが使われている。

中央階段・2階大ホール

中央階段の床には、イタリア産大理石が張られ、その上に赤じゅうたんが敷き詰められています。階段の左右の壁面には、フランス産の大理石が鏡張りされています。中央階段を上った2階大ホール正面の「朝日の間」の左右の壁面には2枚の大油絵(小磯良平画伯作・絵に向かって左側は「絵画」、右側は「音楽」)が飾られています。天井の油絵は第七天国という名が付けられており、

東京芸術大学の寺田春式教授が昭和49年(1974)改修時に描いたものです。

ホールの中心には8本のイタリア産の大理石でコリント様式の大円柱(高さ5.47m)が並んでいます。

(注)コリント様式……ギリシャ建築の三様式の一つ。柱頭にアカンサスの葉を2段に重ねて彫り表したものです。

